

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 498 号	氏 名	合力 悠平
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Simple Risk-Score Model for In-Hospital Major Bleeding Based on Multiple Blood Variables in Patients with Acute Myocardial Infarction</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 International Journal of Cardiology, vol. 346, p1-7, 01 Jan. 2022</p> <p>著者名 Yuhei Goriki, Goro Yoshioka, Masahiro Natsuaki, Kodai Shinzato, Kensaku Nishihira, Nehiro Kuriyama, Mitsuhiro Shimomura, Yohei Inoue, Toshiyuki Nishikido, Tetsuya Kaneko, Kensuke Yokoi, Ayumu Yajima, Yoshiko Sakamoto, Motoko Tago, Atsushi Kawaguchi, Fumi Yamamoto, Atsushi Tanaka, Takanori Yamaguchi, Aya Shiraki, Machiko Asaka, Norihiko Kotooka, Shinjo Sonoda, Yutaka Hikichi, Yoshisato Shibata, and Koichi Node</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】 急性心筋梗塞患者の死亡率や虚血性イベントは primary PCI、薬物療法の発展により減少してきているが、その一方で出血性合併症は増加し、解決すべき問題となっている。従来、急性期における様々な出血に対する予測モデルが提唱されてきたものの、評価項目は急性期に安定した値が得られない場合や、主観的評価に基づくものであり。一方で、血液生化学検査は、救急外来において迅速に測定でき、かつ客観的な指標である。今回、入院時に測定した血液生化学検査のみを用いて急性心筋梗塞患者の新規の出血予測モデルを確立しその有効性を検討した。</p> <p>【方法】 本研究は多施設後ろ向き観察研究で 2014 年から 2018 年の期間に PCI を施行した急性心筋梗塞患者 1684 名を対象とした。入院直後の血液生化学検査項目を解析し、出血性合併症に関連する項目を選定、1 項目ごとに odds ratio の比を用いて点数化しリスクモデルの構築を行なった。本リスクモデルの精度を area under the curve (AUC) を用いて評価し、既存のリスクモデルである ACTION risk model との比較を行なった。</p> <p>【結果】 院内死亡に関連した血液生化学検査項目は血小板数、白血球数、ヘモグロビン値、推定糸球体濾過量、アルブミン値の 5 項目で、これらの項目を用いて 0~5 点のリスクモデルを構築した。それぞれの点数ごとの出血性合併症の割合は点数が増加するほど高くなる傾向を示した。本研究のリスクモデルと ACTION risk model の AUC はそれぞれ 0.793、0.810 (P=0.502) と同等の予測精度を示した。</p> <p>【結論】 本研究の予後予測モデルは、より簡便かつ客観的に出血性合併症を予測できるものと考えられる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 499 号	氏 名	竹内 祐樹
<p>[ 論文題名 ]</p> <p><b>Propofol sedation in the endoscopy room versus operation room during endoscopic submucosal dissection for gastric tumors: a propensity score matching analysis</b></p> <p>プロポフォールを用いた鎮静下での胃腫瘍に対する内視鏡的粘膜下層剥離術： 傾向スコアマッチング解析を用いて内視鏡室施行と手術室施行の比較検討</p> <p>雑誌名，巻（号のみの雑誌は号），頁－頁，発行西暦年</p> <p><b>Digestion 101(4): 450-457, 2020</b></p> <p>著者名 竹内祐樹、山口太輔、山口奈央子、池田圭、吉岡航、福田浩子、森崎智仁、有尾啓介、 綱田誠司、香月亮、富永直之、山崎智子、江口有一郎、緒方伸一、藤本一眞</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>目的：プロポフォールを用いた鎮静下で上部消化管腫瘍に内視鏡的粘膜下層剥離術（endoscopic submucosal dissection: ESD）を施行した症例において、内視鏡室施行と手術室施行で、治療成績や安全性について差があるかどうかを後ろ向きに比較検討することを目的とした。</p> <p>方法：2011年1月から2017年8月に2施設でESDを実施した638例について検討を行った。内視鏡室でプロポフォール鎮静下にESDを施行した532例と、手術室でプロポフォール鎮静下にESDを施行した106例について、傾向スコアマッチング解析を用いて評価を行った。</p> <p>結果：傾向スコアマッチング解析により82ペアを抽出した。両群間での治療結果、麻酔時間、プロポフォールの使用量に有意差はなかった。有害事象に関しては、内視鏡室群が手術室群に比較して酸素飽和度が有意に低下した（18.3% 対 3.7%、<math>p = 0.005</math>）。その他の有害事象（低血圧、徐脈、不整脈）については両群間で有意差は認めなかった。</p> <p>考察：プロポフォールで鎮静してESDを施行する場合、内視鏡室で施行しても酸素飽和度が低下する以外は手術室で施行する場合とほぼ同様の安全性を確保できた。</p> <p>結論：プロポフォール鎮静下で胃腫瘍ESDを施行する場合に、内視鏡室においても酸素飽和度の低下に留意すれば、手術室で行う鎮静と同等の安全性と治療成績が得られた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的，方法，結果，考察，結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 500 号	氏 名	島田 不律
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Lifestyle- and comorbidity-related factors for the prescription of proton pump inhibitors after <i>Helicobacter pylori</i> eradication in Japan</p> <p>日本でのピロリ菌除菌治療後のプロトンポンプ阻害薬処方に及ぼす患者の生活習慣と基礎疾患の影響</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 JGH Open. 5 (11):1284-1288, 2021.</p> <p>著者名 島田不律、遠藤広貴、高守史子、松永拓也、藤本峻、白井慎平、垣内俊彦、芥川剛至、坂田資尚、野出孝一、山内浩平、中村昌太郎、藤本一眞、江崎幹宏</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>目的：生活習慣と基礎疾患がピロリ菌除菌治療成功後のプロトンポンプ阻害薬（PPI）処方に与える影響を後ろ向きに調査した。さらに PPI 処方と内視鏡的逆流性食道炎の重症度との関連性を検討した。</p> <p>方法：済生会唐津病院で2012年から2016年に定期的に上部消化管内視鏡検査を施行され、ピロリ菌除菌療法を受けた患者660人で検討した。除菌治療成功患者の医療記録を調査し、除菌後のPPIの処方、生活関連因子、基礎疾患について調査した。</p> <p>結果：519人で一次除菌治療が成功し、消化性潰瘍や悪性腫瘍などの患者を除外し389人で検討を行った。PPI処方率増加に関連する因子は、高齢（オッズ比：1.06、95%信頼区間：1.03-1.08、<math>P &lt; 0.01</math>）と高血圧（オッズ比：1.95、95%信頼区間：1.05-3.60、<math>P = 0.034</math>）であり、その他の生活関連因子や基礎疾患（併存疾患）は影響を与えなかった。グレードAの内視鏡的逆流性食道炎はPPIの処方に影響を与えず、グレードB/C/DではPPIの処方率を増加させた（オッズ比：6.58、95%信頼区間：2.02-21.46、<math>P &lt; 0.01</math>）。</p> <p>考察・結論：高齢患者と高血圧症患者でピロリ菌除菌成功後にPPI処方が増加した。生活習慣の違いや軽度の逆流性食道炎がピロリ菌除菌成功後のPPI処方に影響を与えることはなかった。</p>			
<p>備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。</p> <p>2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。</p>			

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 501 号	氏 名	藤本 峻
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Decline incidence in upper gastrointestinal bleeding in several recent years: data of the Japan claims database of 13 million accumulated patients 最近数年で上部消化管出血の罹患率は減少している：1300万人の日本医療データセンタークレームデータベースを用いての解析</p> <p>雑誌名，巻（号のみの雑誌は号），頁一頁，発行西暦年</p> <p>Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition 68 (1): 95-100, 2021</p> <p>著者名 藤本峻、鶴岡ななえ、江崎幹宏、高守史子、坂田資尚、下田 良、芥川剛至、野出孝一、安西慶三、杉崎信行、岩切龍一、高木邦彰、山内浩平、藤本一眞</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>目的：大規模な日本の民間保険診療データベースを用いて、上部消化管出血罹患率の最近の傾向を調べることを目的とした。</p> <p>方法：上部消化管出血（静脈瘤出血を含む）の発生率（罹患率）を、2009年から2014年までの20-74歳の延患者13,019,713人について日本医療データセンターの保険診療レセプトデータベースで評価した。発生率を消化性潰瘍と胃食道逆流症と比較した。さらに関連の薬剤処方数の評価も行った。</p> <p>結果：消化管出血の発生率は、2009年から2014年の間に0.137%、0.121%、0.113%、0.106%、0.099%、および0.105%であり、時間依存的に減少した（<math>p &lt; 0.001</math>）。消化性潰瘍（出血の発生率の10倍以上）の発生率も時間とともに減少し（<math>p &lt; 0.001</math>）、胃食道逆流症は増加した（<math>p = 0.006</math>）。上部消化管出血は、男性患者と高齢患者（60-74歳）で高かった（<math>p &lt; 0.001</math>）。抗血栓薬とプロトンポンプ阻害剤の処方率は、2009年から2014年にかけて増加していた（それぞれ <math>p &lt; 0.001</math>）。</p> <p>考察・結論：日本の比較的大規模な実臨床データベースの検討では、消化性潰瘍の減少に伴い、上部消化管出血の発生率が2009年から2014年にかけて減少した。発生率の低下は、時間の経過に伴う疾患構造変化と薬剤処方を含む治療戦略変化が原因であった可能性が考えられた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的，方法，結果，考察，結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 502 号	氏 名	高井 雅之
<p>[ 論文題名 ] Establishment of a novel ELISA system for measuring periostin independently of formation of the IgA complex</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Annals of Clinical Biochemistry, in press</p> <p>著者名 Masayuki Takai, Junya Ono, Masaki Okamoto, Kiminori Fujimoto, Ayami Kamei, Satoshi Nunomura, Yasuhiro Nanri, Shoichiro Ohta, Tomoaki Hoshino, Arata Azuma, and Kenji Izuhara</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】 ペリオスチンは様々な疾患で有用なバイオマーカーとなる可能性を有しているマトリセルラータンパクである。ヒト血清中のペリオスチンは IgA と複合体を形成しており、測定に影響を与えている可能性がある。本研究では、複合体形成が従来 ELISA 法の測定値に与える影響の評価、ペリオスチンの各ドメインが ELISA 測定値に与える影響の評価、および複合体形成の影響を受けない新規 ELISA 法の確立を目的とした。</p> <p>【方法】 還元条件下で血清ペリオスチンと IgA を乖離させ、ELISA 法および免疫沈降法を用いて抗体とペリオスチンの結合に対する複合体形成の影響を評価した。</p> <p>【結果】 従来 ELISA 法の血清ペリオスチン測定値は還元条件下で有意に上昇した。従来 ELISA 法において、ペリオスチンの R1 ドメインを認識する SS18A 抗体への結合量が、ペリオスチンと IgA の複合体形成によって低下していた。複合体形成の影響を受けない R3 および R4 ドメインを認識する SS16A 抗体および SS17B 抗体を組み合わせることで新規 ELISA 法を確立した。</p> <p>【考察】 ペリオスチンと IgA の複合体形成の影響を受けない新規 ELISA 法は血清中のペリオスチンを正確に測定可能であり、従来法とは異なる有用性を持つ可能性がある。</p> <p>【結論】 IgA 複合体形成の影響を受けないペリオスチン新規 ELISA 法を確立した。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 503 号	氏 名	藤本 亮太
<p>[ 論文題名 ] Bio-3D printing of scaffold-free osteogenic and chondrogenic constructs using rat adipose-derived stromal cells</p>			
<p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Frontiers in Bioscience-Landmark, 27(2), 052, 2022</p>			
<p>著者名 Ryota Fujimoto, Daiki Murata, Koichi Nakayama</p>			
<p>[ 要 旨 ] <b>研究の目的</b> 広範囲骨欠損の再建においては、様々な制限から人工材料による再建となる場合が少なくない。しかしながら、人工材料を用いた再建では、異物反応や術後感染症などが問題となることがある。そこで我々は、人工材料を用いることなく、細胞のみで3D構造体を作製し、広範囲骨欠損へ移植可能な骨様および軟骨様構造体を創出することを目的とした。</p>			
<p><b>方法</b> ラットの皮下脂肪組織から脂肪由来間葉系幹細胞(ADSCs)を採取し、多分化能を確認した後、剣山式バイオ-3Dプリンタを用いて円筒状の細胞構造体を造形した。構造体は、引張試験により強度の評価を行った。さらに、骨および軟骨誘導を行い、<math>\mu</math>CTによる画像評価と組織染色による評価を行った。</p>			
<p><b>結果</b> 足場材料を用いずに、ADSCs-3D構造体の作製に成功した。作製した構造体は、未誘導の状態では筋肉などの軟部組織と同程度の強度を有していた。<math>\mu</math>CTによる評価では、健全皮質骨と同程度のCT値を示す石灰化が認められ、組織評価でも同部位へのカルシウム沈着が確認された。また、軟骨様構造体の組織評価では、軟骨細胞への分化および軟骨基質の産生が認められた。</p>			
<p><b>考察</b> ADSCsのみで3D構造が維持できることが示され、ADSCs構造体の誘導実験の結果から硬組織再生への応用可能性が示唆された。今後は、培養条件の改善、圧縮試験による強度の評価、移植実験を行う必要があると考える。</p>			
<p><b>結論</b> ADSCsのみを用いて、スキャフォールドフリー骨様および軟骨様3D構造体の作製に成功した。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 504 号	氏 名	新名美佳
<p>[ 論文題名 ]  <b>Effects of neonatal rearing by different types of foster mother on the distribution of corticotropin-releasing factor neurons in the central amygdaloid nucleus in rats</b>  Experimental Brain Research, Oct 01 2022, doi: 10.1007/s00221-022-06468-7.</p> <p>著者名 Mika Niina-Nakamura, Hitoshi Kawano</p> <p><b>目的</b>：新生児期の母子関係は中枢神経系の発達に重要な役割を果たす。しかし、実母以外の養育者（里親）が新生児に関わることによる神経系への影響については十分明らかになっていない。そこで本研究では、新生児期の養育の違いによる、扁桃体中心核（CeA）におけるコルチコトロピン放出因子免疫陽性（CRF-ir）ニューロンの分布への影響を明らかにすることを目的とした。</p> <p><b>方法</b>：新生児期のラットを 4 群に分け、実母（OM）、初産で授乳期にある里親（FL）、授乳はできないが子育て経験がある里親（FE）、母子分離（MS）による飼育を生後 1～20 日目に 3 時間/日行った。その後、各群 6 週齢のラットについて、30 分間の急性拘束ストレス（ARS）負荷の有無による、CeA 内 CRF-ir ニューロンの密度変化を調べた。本研究では全て雄のラットを使用した。</p> <p><b>結果</b>：FL および MS 群の CRF-ir ニューロンの密度は、ARS 負荷のないラットよりもあるラットの方が有意に低かった。ARS 負荷がない場合もある場合も、それぞれの群間の比較において有意差は見られなかった。</p> <p><b>考察</b>：私たちの知る限り、本研究は里親として FE と FL を使用した初めてのモデルである。本結果は、初産で授乳期にある里親による養育は、新生児にとって母子分離と同様に慢性的なストレスとなり、CeA の CRF ニューロンの発現に影響を与えたと考えられる。</p> <p><b>結論</b>：新生児期の里親との関係は、CeA の CRF ニューロンの機能的成熟に影響を及ぼすことが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 505 号	氏 名	成瀬 尚美
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Utility and safety of the self-expandable metallic colonic stent in Japanese patients who received systemic chemotherapy or palliative treatment for obstructive primary advanced colorectal cancer: A retrospective single-center medical chart evaluation</p> <p>閉塞性原発進行大腸癌に対して化学療法または緩和治療を受けた患者における自己拡張型金属大腸ステント挿入の有用性と安全性：単一施設での後ろ向き研究</p> <p>雑誌名，巻（号のみの雑誌は号），頁一頁，発行西暦年 JGH Open 6 (5): 324-329, 2022</p> <p>著者名 成瀬尚美、宮原貢一、坂田資尚、高守史子、伊東陽一郎、樋高秀憲、鮫島隆一郎、鶴岡ななえ、山内康平、野田隆博、藤本一眞、江崎幹宏</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>目的：大腸癌による閉塞へのステント留置の有用性と安全性を、留置後に化学療法または緩和治療を受けた患者で検討した。</p> <p>方法：唐津赤十字病院で 2012 年から 2020 年に原発性大腸癌閉塞に自己拡張型金属大腸ステントを留置した 71 例で検討した。留置後の成功率（有用性）と合併症率（安全性）を、I 群（留置後外科手術）と II 群（留置後に化学療法または緩和治療）で比較検討した。II 群は、さらに化学療法群（II-A 群）と緩和治療群（II-B 群）で比較した。</p> <p>結果：I 群と II 群の比較では、II 群で BMI，血清アルブミン，ヘモグロビンが低値であり、米国麻酔学会全身状態分類は I 群が良好で、病期は II 群で進行していた。ステント挿入の成功率は両群で差がなかった。ステント挿入後の早期合併症率は差がなかった（I 群：10.3%、II 群：14.2%）。II-A 群と II-B 群の比較では、II-B 群で平均年齢が高く、アルブミンは低値だった。パフォーマンスステータスは II-A 群が良好で、病期は II-A 群が進行していた。挿入成功率と挿入後の早期合併症率と後期合併症率は差がなかった。1 年以上生存率は II-B 群が高かった。</p> <p>考察・結論：原発性大腸癌による閉塞に対する大腸ステント挿入は、化学療法および緩和療法で治療した患者においてもステント挿入後に外科手術に移行した群と同等の有用性と安全性をもって施行できることを示す結果であった。</p>			

備考 1 論文要旨は，600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は，研究の目的，方法，結果，考察，結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 506 号	氏 名	天本 宗次郎
<p>[ 論文題名 ]  <b>Involvement of the PI3K/AKT Pathway in the Formation and Fusion of Spheroids Derived from Human Dermal Fibroblast for Tissue Engineering Technology.</b></p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  <b>Cell and Tissue Biology, 2022, Vol. 16, No. 4, pp.312-329.</b></p> <p>著者名  <b>S. Amamoto, M. Itoh, B. Takahashi, T. Kitsuka, K. Uchihashi, D. Murata, K. Node, K. Nakayama, K. Kamohara</b></p> <p>[ 要 旨 ]  <b>Background:</b>          ヒト皮膚線維芽細胞から、自家細胞由来の人工血管の作製に成功し、臨床への応用が期待されているが、組織構築の最適化が求められている。この技術は、ヒト皮膚線維芽細胞由来のスフェロイドの形成や融合が組織構築の基盤となるため、そこに焦点を当て、何が影響するのかを検討する必要がある。本研究では、ヒト皮膚線維芽細胞由来スフェロイドの形成や融合を、PI3K/AKT カスケードに焦点を当て評価をおこなった。</p> <p><b>Methods and results:</b>          ヒト皮膚線維芽細胞由来スフェロイドを使用し、形成や融合の程度を評価した。PI3K/AKT 経路を抑制すると、有意差をもって MCS の形成や融合が阻害され、PI3K/AKT 経路を促進すると、有意差をもって MCS の形成や融合が促進された。各群との間で、相対的発現差(&gt;2 倍)があり、細胞接着や経路に関連する、6 つの遺伝子 (ITGB1, PTK2, MAP2K1, PDK1, GJA1, PI3KR1) を同定し、遺伝子発現に有意差があることを確認した。</p> <p><b>Conclusions:</b>          PI3K/AKT カスケードの抑制、活性化がスフェロイドの形成と融合を阻害、促進に関連することを示した。本研究によって、スフェロイドの形成と融合現象のメカニズム解明、スフェロイドや組織構築の最適化の一助となり得、再生医療の発展に貢献する可能性がある。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 507 号	氏 名	高橋 巴久
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Impact of after-hours surgery on outcomes of acute type A aortic dissection repair</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年          Surgery Today, 52, 1453-1462, 2022</p> <p>著者名          Baku Takahashi, Keiji Kamohara, Sojiro Amamoto, Atsushi Kawaguchi</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>Purpose: To establish whether emergency surgery performed outside working hours (after hours) contributed to adverse outcomes for patients with acute type A aortic dissection (ATAAD).</p> <p>Methods: We reviewed the operation records of ATAAD repair in our institution from 2004 to 2019 (n = 187). Emergency surgery was performed by one of a few teams of experienced surgeons, regardless of the time of day. Patients were divided into two groups based on the surgery start time: during working hours (n = 65) and after hours (n = 122). A propensity score-matched analysis was performed for 58 pairs of patients.</p> <p>Results: The overall in-hospital mortality was 6.9% for the working-hours group and 13.8% for the after-hours group. There were no significant differences between the groups in the relatively limited study population (n = 187). Surgeon experience and aortic interventions did not differ remarkably between the groups. After-hours repair was not associated with postoperative complications. There were no significant differences in the long-term survival or aortic event-free rates between the groups.</p> <p>Conclusions: After-hours surgery did not affect the short- or long-term outcomes of ATAAD repair under our backup system, which supports the recommendation of immediate surgical repair. Efforts to minimize the discrepancies between working hours and after hours repair could help to improve the surgical outcomes of patients undergoing ATAAD repair.</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 508 号	氏 名	岩本 祐一
<p>[ 論文題名 ] Development of a self-evaluation scale of nursing practices for improving sleep quality among dementia patients taking sleeping pills</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Nursing Practice Today (in press)</p> <p>著者名 Yuichi IWAMOTO, Narumi FUJINO, Takaomi FURUNO, Yuji FUJIMOTO</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】 近年, 多くの認知症患者が睡眠障害を有するとの報告がある. 睡眠障害に対する薬物療法は極めて重要であるが, 認知症患者への薬物療法においては, Polypharmacy や不適切な薬剤の処方(PIMs)が課題となっている. 本研究では睡眠薬服用中の認知症患者に対する Nursing Practice の質の向上, さらに看護師の薬物治療への参画を目的として, Development of a self-evaluation scale of nursing practices for improving sleep quality among dementia patients taking sleeping pills を作成し, その妥当性・信頼性を確認した.</p> <p>【方法】 尺度原案の Items pool を目的に Expert level nurses 6 名に Interview surveys を行った. 次に, Interview surveys と Literature review を基に作成した予備的尺度を用い, 全国の認知症疾患医療センターで働く Nurses with psychiatric ward experience を対象に郵送法による全国調査を実施した.</p> <p>【結果】 分析対象とした 525 名 (回収率: 48.2%) のデータを解析した結果, 【Promoting daytime activities】, 【Providing a high-quality sleep environment through appropriate use of medication】, 【Considering adverse events】の 3 因子 16 項目からなる尺度が完成した. 基準妥当性は, 既存の尺度を外部基準として相関係数を算出することで確認した. 次に, 収束的妥当性と判別的妥当性の両面から構成要素の妥当性を検討した. 平均分散抽出量 (AVE) は各因子それぞれ 0.323, 0.328, 0.324 であった. 判別妥当性は AVE の 2 乗と因子相関を比較することで検証した. AVE はすべての因子において因子間相関の 2 乗より高く, 判別妥当性が確認された.</p> <p>【結論】 本尺度は妥当性及び信頼性が検証され, 睡眠薬服用中の認知症患者の睡眠の質向上に向けた Nursing Practice の Best Practice Model の開発に寄与できる.</p>			

備考 1 論文要旨は, 600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 509 号	氏 名	古賀 風太
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Gemcitabine plus nab-paclitaxel in older patients with metastatic pancreatic cancer: A post-hoc analysis of the real-world data of a multicenter study (the NAPOLEON study)</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Geriatric Oncology, 第 13 巻, 82 頁~87 頁, 2022 年</p> <p>著者名 古賀風太、河口康典、下川元継、村山賢一郎、中下俊哉、大座紀子、嬉野紀夫、高橋宏和、上田裕二郎、中澤潤一、小森梓、大津智、有馬志穂、深堀理、牧山明資、田口宏樹、本田琢也、澁木太郎、二尾健太、井手康史、水田敏彦、白川剛、大塚大河、三ツ木健二</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>【目的】</b> 75 歳以上の高齢、転移性膵癌患者におけるゲムシタビン・ナブパクリタキセル併用療法 (GnP 療法) の有効性と安全性を検討した。</p> <p><b>【方法】</b> 自施設を含む 14 施設で 1 次治療として GnP 療法を行った転移性膵癌 153 症例の後方視的研究。75 歳以上を高齢者群、75 歳未満を非高齢者群と定義し 2 群間での生存、抗腫瘍効果、安全性を検討した。高齢者群では予後予測する因子の検討を追加した。</p> <p><b>【結果】</b> 高齢者群で年齢中央値と悪性腫瘍の既往を有する割合が高く、非高齢者群で CRP 値が高値である点以外は治療前の患者背景に差はなかった。治療開始時に薬剤が減量開始となっていた割合は高齢者群で 40% と有意に多く (<math>p&lt;0.01</math>)、相対用量強度は有意に低かった (<math>p&lt;0.05</math>)。抗腫瘍効果及び有害事象に群間差はなかった。高齢者群で無増悪生存期間の中央値: 5.5 か月、生存期間の中央値: 12 か月、非高齢者群で無増悪生存期間の中央値: 6 か月、生存期間の中央値: 11.1 か月 (<math>p=0.21</math>, <math>p=0.43</math>)。高齢者群で Geriatric Nutrition Risk Index (GNRI) が 86 未満の症例は、生存期間中央値: 4.9 か月 (<math>p&lt;0.01</math>) と予後不良であった。</p> <p><b>【考察】</b> 高齢者群では治療強度は低いものの、非高齢者群と遜色のない治療成績が得られた。全身状態が維持された GnP 療法の対象となる高齢者群では身長、体重、血清アルブミン値で算出できる GNRI 値が、治療前の予後予測の因子となりうると考えられた。</p> <p><b>【結論】</b> GnP 療法は 75 歳以上の高齢・転移性膵癌患者においても認容性がありかつ有効な治療法である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600 字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 510 号	氏 名	中島 武馬
<p>[ 論文題名 ] Osteoconductivity and neurotoxicity of silver-containing hydroxyapatite coating cage for spinal interbody fusion in rats</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 JOR spine, e1236, 2022</p> <p>著者名 Takema Nakashima, Tadatsugu Morimoto, Akira Hashimoto, Sakumo Kii, Masatsugu Tsukamoto, Hiroshi Miyamoto, Mitsugu Todo, Motoki Sonohata, Masaaki Mawatari</p> <p>[ 要 旨 ] 【目的】脊椎インプラントの使用は、手術部位感染の危険因子の一つであり、抗菌インプラントが注目されている。我々は抗菌性を有する銀と骨伝導性の高いハイドロキシアパタイト (HA) を複合した銀含有ハイドロキシアパタイト (Ag-HA) コーティングを開発した。本研究では、Ag-HA コーティングを施した椎体間ケージの骨伝導性と神経毒性をラット腰椎椎体間で評価した。【方法】3種類のチタン製椎体間ケージ (非コーティング、HA コーティング、3%Ag-HA コーティング) を使用した。10週齢SDラットを3群 (Ti群、HA群、Ag-HA群) に分け、腰椎前方固定術を行った。術後8週で屠殺し、固定した椎体を摘出した。骨伝導性を評価するため、マイクロCTでケージ周囲の骨体積分率 (BV/TV) を測定し、病理組織検査でケージ周囲の骨接触率・骨形成率を調査した。神経毒性の評価として、術前と術後1、2、4、6、8週にToe pinch testとInclined plane testを行い、また病理組織検査で脊髄の性状を観察した。【結果】BV/TVは3群間に有意差はなかった。骨接触率は、HA群、Ag-HA群がTi群に比べ有意に高く、一方で骨形成率は3群間で有意差を認めなかった。Toe pinch testおよびInclined plane testでは、3群とも運動機能および感覚機能の有意な低下は認められなかった。さらに、組織学的に脊髄の変性、壊死、銀の蓄積は見られなかった。【結論】本研究は、Ag-HA コーティングの椎体間ケージが良好な骨伝導性を示し、神経毒性を伴わないことを示唆するものである。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 511 号	氏 名	<b>PERVEEN RASHEDA</b>
<p>[ 論文題名 ]</p> <p>Induction of premature senescence and a less-fibrogenic phenotype by programmed cell death 4 knockdown in the human hepatic stellate cell line Lieming Xu-2</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  <b>Human Cell 2023 in Press</b>          (Published online 16 December 2022: <a href="https://doi.org/10.1007/s13577-022-00844-9">https://doi.org/10.1007/s13577-022-00844-9</a>)</p> <p>著者名  <b>Rasheda Perveen, Iwata Ozaki, M. Manirujjaman, Keiichiro Mine, Yuzo Murata, Kenichi Tanaka, Jinghe Xia, Hirokazu Takahashi, Keizo Anzai, Sachiko Matsuhashi</b></p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>(背景・目的) Programmed cell death 4(PDCD4)遺伝子は当初腫瘍抑制遺伝子として報告され癌細胞の増殖や浸潤・転移を抑制することが示されてきた。その一方で最近の研究は PDCD4 遺伝子発現の不活化が細胞増殖の抑制や細胞死、細胞老化を誘導することも報告され PDCD4 が多彩な機能を有することが示されている。本研究では肝臓の線維化に重要な役割を果たす肝星細胞株 LX-2 を用いて、PDCD 4 が星細胞の活性化や線維産性能に及ぼす影響を検討した。</p> <p>(方法及び結果) PDCD4 を siRNA を用いてノックダウンすると細胞老化マーカーである <math>\beta</math>-ガラクトシダーゼ陽性細胞が増加、p21 遺伝子の発現が増加し LX-2 細胞の増殖は抑制された。この p21 の発現増加は p53 非依存的に起こり、notch シグナルを伝達する CSL 遺伝子の発現減少を伴っていた。この間、星細胞の活性化マーカーである <math>\alpha</math> SMA の発現が増加していたが線維成分である I 型、III 型コラーゲンの発現が減少、線維分解酵素である MMP-1 や MMP-9 の発現は増加、MMP 活性を阻害する TIMP-1 の発現は変わらなかった。</p> <p>(考察) 以上の結果は PDCD4 遺伝子の発現抑制は肝星細胞の増殖抑制、細胞老化を誘導する一方で星細胞による線維形成を抑制していることを示しており、PDCD4 が線維化治療の標的となりうる可能性を示すものである。</p> <p>.</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 512 号	氏 名	岩本 脩平
<p>[ 論文題名 ]  Oral specific microenvironments regulate cell behavior and anti-cancer drug sensitivity of tongue squamous cell carcinoma</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年  Human Cell, <i>in press</i></p> <p>著者名  Shuhei Iwamoto, Megumi Nishiyama, Maki Kawasaki, Sayuri Morito, Takehisa Sakumoto, Shuji Toda, Yoshio Yamashita, Shigehisa Aoki</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p><b>目的</b>  癌周囲微小環境の構成要素として細胞因子と物理因子がある。舌癌において周囲の線維芽細胞は細胞因子となる。癌周囲の間質液の流れや唾液による液体の流れ刺激と空気に曝露された気相-液相界面は物理因子である。従って、舌扁平上皮癌の細胞動態を評価するには、これらの舌特異的な微小環境を試験管内で再現する必要がある。本研究では、各微小環境因子が舌扁平上皮癌に及ぼす影響と、抗悪性腫瘍薬に対する薬剤感受性の変化を解析した。</p> <p><b>方法</b>  舌に特異的な物理環境因子(流体刺激)を再現する培養システムを確立し、ヒト舌扁平上皮癌細胞株(SAS、HSC-3)、線維芽細胞(マウス線維芽細胞株 NIH-3T3、ラット舌由来初代培養細胞、ヒト線維芽細胞株 TIG-121)を用いて細胞間相互作用を再現した。形態学的変化、細胞増殖能、アポトーシス能、蛋白発現、薬剤感受性を解析した。</p> <p><b>結果</b>  流体刺激および線維芽細胞は癌細胞の増殖能、アポトーシスを相乗的ないし独立して調節した。また、線維芽細胞および流体刺激は MAPK 経路の制御に寄与した。流体刺激下において薬剤感受性は促進されたが、線維芽細胞は薬剤感受性を抑制した。</p> <p><b>考察</b>  癌周囲微小環境を構成する細胞因子と物理因子は独立ないし相乗的に舌癌細胞に作用することが示唆された。</p> <p><b>結論</b>  舌扁平上皮癌における特異的微小環境を再現する培養モデルを確立し、微小環境が舌扁平上皮癌の悪性度や薬剤感受性に寄与する。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

## 論文要旨

報告番号 甲・乙	第 513 号	氏 名	村山 雅俊
<p>[ 論文題名 ] Nupr1 deficiency down-regulates HtrA1, enhances SMAD1 signaling, and suppresses age-related bone loss in male mice</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Journal of Cellular Physiology, in press</p> <p>著者名 Masatoshi Murayama, Hirohito Hirata, Makoto Shiraki, Juan L. Iovanna, Takayoshi Yamaza, Toshio Kukita, Toshihisa Komori, Takeshi Moriishi, Masaya Ueno, Tadatsugu Morimoto, Masaaki Mawatari, Akiko Kukita</p> <p>[ 要 旨 ]</p> <p>【目的】 ストレス応答蛋白質 Nuclear protein 1 (NUPR1)の骨形成と老化における作用機構を明らかにする。</p> <p>【方法】 若齢と老齢の WT (野生型)、Nupr1KO (ノックアウト) マウス由来の椎体、大腿骨の骨構造解析を行った。マウスの骨由来の骨細胞画分と培養骨芽細胞及びヒト変形性関節症患者の骨細胞画分における遺伝子や蛋白質の発現解析を行った。</p> <p>【結果】 骨細胞の網羅的比較遺伝子解析において、骨形成を阻害し細胞老化を促進するセリンプロテアーゼ high temperature requirement A 1 (HTRA1) が WT と比較し KO マウスで著しく低下していることを見出した。KO の骨芽細胞においても、HtrA1 の発現が低下し、骨形成シグナル SMAD1 の活性化が亢進した。Nupr1 の過剰発現は HtrA1 の発現を増強した。さらに、KO 雄マウスにおいては、WT と比較し加齢に伴う脊椎海綿骨量の減少が抑制され、骨細胞における老化関連マーカーの発現も減少した。一方、雌マウスでは加齢に伴う骨量減少や老化関連遺伝子の発現の KO と WT マウスとの顕著な違いが見られなかった。また、骨芽細胞の酸化ストレスは Nupr1 及び HtrA1 の発現を誘導し、Nupr1 の過剰発現は老化関連マーカーの発現を増加した。変形性膝関節症患者の骨から分離した骨細胞における NUPR1 の発現は年齢と正の相関を示した。</p> <p>【考察および結論】 Nupr1KO 雄マウスでは、HtrA1 の発現低下を介した骨芽細胞分化の亢進と老化細胞の減少により加齢による骨量減少が抑制されたことが考えられた。NUPR1 は骨形成と加齢に伴う骨量減少に重要な役割を持つことが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。